人を熱心にみちびき敎へ、焦らないでただ將來の櫓を守る、立派な人達につくり上げるやう、各部の首腦者達は肝膽を碎いてもらひたい。早くものになり、一寸さわがれ、それで得意になるやうな可い加減な仕上げはだんぜん禁物である。

諸師匠の苦心が判然形に現はれて、私達を滿足さすやうになつた時、その頃まで私が長命するか何うかは誰にも分らない。それまでの所は實は、一方さへうまく行つて居れば一切申し分は無いのであるが、慾を言へば矢張り私達をも少しはよろこばして頂きたい。それは櫓下の演奏を必ず榮三主役の人形で飾ることである。榮三師の實に見事な女形、若衆、二枚目などを、古靱師の語り物で見せてもらふことである。これは是非實現して、模範のもの、我が國で今日見られる最首位のものはここにあるといふ誇りを、文樂へ、そこの藝術、その長い歴史へ添へるやうに運ばれたい。

それから一段一時間ぐらゐの曲を、少くも三つは毎興行出してもらひたい。人數はあるのだから前々から準備させて、代るがはるやるやうに。とても聞いて居られないやうなら落伍させる。さうして數年の間に、櫓下につづく二人の「一人前の大夫」をこしらへる。三つは斯うしたちやんとした語り物が無いやうだと、嚴密に言つて「我が文樂」なるものは存在してゐないと同じである。もとより我々は一段だけよいのを聞けば滿足なのだから、この二つは先づ何れくらゐ惡くてもよいのであるが、惡いよりは可なりの方が宜い。可なりよりむろんよい方がよい譯である。中堅どこの勉强にもなつて一擧兩得と言つた筋になるのではなからうか。

古靱大夫の語り物としては、その傑作中の傑作と折紙の附いたもの、それを先づ出して、その次は同師の研究物、初役でもすつかり改められたものでもよい、それを出し物にする少くも交互に列べる。あるひは一興行中に、出來るなら二つを聞かせる。ほんたうを言つて世間の人は誰も、まだ古靱大夫の眞價をよく知つて居らず、私達とてその方の卒業へはまだ餘程の距離があるのだから、座の人がみなうんと勉强するやうに私達も負けずに一生懸命やつて見たい。あへて新方法を提唱するゆゑんである。(完)

○

中野孝一

古靱大夫が津大夫のあとをうけて文樂座の櫓下に推され、來初春興行にその披露をやる事になつたそうである。これは當然過ぎる筋道の落ちつきで、本人にしても格別榮進とも思つてゐまいし、それにこの人はかつてこの櫓下問題には祟られた人である。ほろにがい不快な想ひ出のまつはる櫓下に今更ならされたとて、傍から騷ぐほどそう單純なよろこびに浸り得られないといふのがかけねのない本音であるかもしれ

ない。

一體檜下といふのは斯道最高の名譽を表彰する唯一無二の藝術章に止るのであらうか。もしくはその榮位と名譽に附隨する重く煩はしい責任のある政治的意味があるのでないだらうか。ただ榮位を擁して權力だけを振り廻した人もあつたらしく想像されるので、私には何が何やら一向見當がつきかねるのであるが、人形淨瑠璃の總理大臣として、斯道の興廢をその双肩に擔つて行かなければならない重責があるとすればこれは中々厄介で、こういふ第二義的な努力に貴重な精魂を消磨させる事は遺憾である。出來得ればこうした渦中にひき入れずに靜に藝道三昧に逍遙させてあげたい。藝道完成を念願に一途の愛執に生きぬかせたい。これは古靱に獨善を望むやうだが、却つてこの方が斯道再興隆を期する捷徑ではないかと私には思はれる。

打ち續いた家庭的の不幸事の悲寥を超克して、藝の向上のための寧日なき精進のみで精一杯だらうにもかかはらず、餘命を更らに實踐に運動に捧げやうとする健氣さに悲壯限りないものを感ずるだけ、まづ何よりも望ましきはこの人の健康と長壽といふ事である。これは期待でなくして期待を實現させる緊要の條件であり、私の衷心の願望であり、片時も忘じ得ざる祈願に外ならないのである。

○

鴻池幸武

豐竹古靱大夫が檜下を襲任した事は、こゝ十數年來大成された彼の藝からいつて、當然過ぎる事で、且、その時機が隨分遲れすぎてゐた事であるから、格別に芽出度い出來事と大騷ぎする必要はないと思ふ。しかし、過去十數年來、凡そ古今にその例を見ない非檜下的技藝の持主の故竹本津大夫が檜下の任に座り續け、爲に檜下といふ藝の目標、引いては義大夫節全般に亘る藝の標準及び段階が全く失はれ、斯藝の墮落の癌的根據が存在してゐた無秩序時代が、古靱大夫の檜下襲任によつて、着々秩序化され、整備されつゝあると信じ得るのは、私が義大夫節を愛好し始めて以來の一番大きい欣びである。言葉を換へると、我々は大正十三年三代目越路大夫の歿後、實に、久し振りでほんたうの檜下に接し得たのである

こゝで、私は計らずも古靱大夫の技藝を本當の檜下的技藝に關して檢討せねばならなくなつた。所が殘念な事には、私の知つてゐる檜下は前記の津大夫一人である。餘儀なく年長者から聞及んだ咄を綜合して、比較論的に古靱大夫の藝を檢討して見る。

まづ最近物故した斯藝批評家の古老の咄によると、古靱大